

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院学生研究

2016 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 社会学 研究科 社会学 専攻		
研究代表者 (2017年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科社会学専攻 博士課程前期課程2年	庄子 諒 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	社会学部 教授	奥村 隆 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
研究課題	東日本大震災後の福島における住民の意思表示に関する コミュニケーション社会学的研究		
研究組織 (研究代表者 ・共同研究者) ※2017年3月現在 のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科社会学専攻 博士課程前期課程2年	庄子 諒	
研究期間	2016 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、福島第一原発事故以後の福島で暮らす人々が、原発事故や放射能汚染といった福島が抱える問題に対する意思表示をいかに可能にしているかを明らかにしたものである。東日本大震災後の福島においては、福島が抱える問題に関する二項対立が激化し、住民間のコミュニケーション分断が生じていることが指摘されている。そこで本研究では、福島の人々が、原発事故や放射能汚染といった問題を笑いのネタにするユーモアを用いてコミュニケーションを行うことに着目した。そうしたユーモアを用いることが、あからさまでない意思表示として、コミュニケーション分断を乗り越える方途となり得るのかについて、その可能性と限界を示した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 福島第一原発事故 } { コミュニケーション分断 } { ユーモア }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、福島第一原発事故以後の福島で暮らす人々が、あからさまではない意思表示の一形態として、なぜ原発事故や放射能汚染といった福島が抱える問題を笑いのネタにするユーモアを用いてコミュニケーションを行うことができるのか/できないのか、について明らかにしたものである。

1. 問題意識

東日本大震災および原発事故後の福島においては、そもそもは同じ立場にある被害者どうしのコミュニケーションにおいて、放射能が安全か/危険かといった二項対立が激化し、住民間の分断が生じていることが指摘されている。まず本研究では、そうしたコミュニケーション分断に関する先行研究を整理し、その課題を明確にした。この状況下では、福島の人々は、分断や対立に縛られ、抑圧され沈黙する、ひたすらに受動的な存在になってしまう。そこで本研究が着目したのが、原発事故や放射能汚染といった福島が抱える問題をネタにしたユーモアを交わすこと、いわば「諧謔的なコミュニケーション」である。なぜ福島の人々は、そうしたユーモアを用いて能動的に相手を笑わせることができるのか。震災後の福島における諧謔的なコミュニケーションの可能性について、そして同時に、不可能性について考えていった。

2. 先行研究

次に、笑いやユーモアに関する先行研究を整理し、その社会的な働きについてまとめた。ベルクソンによる笑いの社会的機能の議論では、笑いは社会秩序を維持するが、逆に、社会への抵抗となる笑いもある。そうした笑いは、遊びに関する議論を参考にすると、現実からの「離脱」を可能にし、癒しや自由をもたらすとともに、現実を相対化して批判する遊びの態度として理解できる。だが同時に、現実に「拘束」されているからこそ、現実のなかに遊びを生み、現実を変革し得るという指摘もあった。また、具体的な事例として視覚障害者による「自虐」を取り上げ、非当事者の緊張を緩和させる、当事者によるユーモアの存在を確認した。

3. 調査結果

本研究では、大きく分けて3つの調査を実施し、その分析に取り組んだ。

まず1つ目としては、福島県にあるAMラジオ局の社員・アナウンサー計3名へのインタビュー調査から、諧謔的なコミュニケーションの困難さを描き出した。いまなお避難が続く被害の悲惨さと、そこから生じた対立や分断の根深さを意識すると、そうした問題をネタにするユーモアは不可能になってしまう。むしろ、そうしたユーモアを用いず、福島が抱える問題の深刻さに触れることを一切「回避」することによって笑いを可能にするという、まったく別の方策が示された。言い換えれば、問題について語ることから「離脱」することで、誰もが笑うことができるようになる。こうした笑いが、問題を抱える人々にとって、癒しをもたらしていることは間違いないだろう。

2つ目としては、諧謔的なコミュニケーションの経験について、インタビュー調査および参与観察によって得られた中通り地方の住民8名の語りを分析した。原発事故や放射能汚染に関するユーモアを思いついたとしても、相手が冗談を冗談として受け取り、笑ってくれると確信できないと、諧謔的なコミュニケーションは断念される。相手が自らと立場が異なると感じた場合には、諦める事例が見られた。また、試みたけれども失敗した、という事例も多い。加えて、諧謔的なコミュニケーションを行うことは当事者の「特権」である、という語りがあった。自らを当事者であると位置づけることができているならば、つまり、福島が抱える問題のなかに「拘束」されていてこそ、笑わせるという特権を得る、ということである。

3つ目としては、福島を中心に活動するお笑い芸人「母心」が披露してきた「原発ネタ」漫才について、インタビュー調査を行った。彼らは、福島の芸人として、原発事故や放射能汚染という問題に向き合わないことは嘘になると考えた。発災直後いったん県外に避難したが、漫才がつかれなくなった彼らは、すぐ福島に戻り、福島が抱える問題に「拘束」されることを選んで始めて、それを笑いのネタにできた。完成した「原発ネタ」漫才には、彼ら自身の福島での経験と、そのとき抱いた怒りや呆れなどの「感情」が込められている。漫才で笑いを取るためには、本気でその感情を込めて語る必要があるという。問題に「拘束」されたことで、そうした本気の感情を得ることができたのである。さらにこの漫才には、笑ってもらえるための工夫が張り巡らされており、相手を傷つける笑いにはしない丁寧な配慮のもとで、人々の「共感」を得られるつくりがなされてい

研究成果の概要 つづき

た。彼らはこの漫才で、県内外のさまざまな立場の人々を笑わせていく。この漫才が福島の人々から批判されることはなかった。東京をはじめ県外にも進出し、寄席やライブなどで爆発的な笑いを生み出していったが、漫才大会の決勝や、名古屋や大阪といった遠方の舞台などでは、笑いを取れないという限界も多くあった。

4. 結論

以上、これまで見てきた原発事故や放射能汚染に関する諧謔的なコミュニケーションについての語りからその不可能性と可能性を考察した。

まず、諧謔的なコミュニケーションの不可能性、「笑えなさ」を生み出す要因を指摘できる。はじめに、発災直後の混乱した状況では、娯楽的なもの自体が困難になる。次に、被害の悲惨さを想起してしまうと、そうした被害を扱うユーモアでは笑えない。さらに、自らを非当事者だと位置づける人にとっては、こうしたユーモアは難しい。最後に、当事者同士であっても、相手を傷つけてしまうかもしれない、不謹慎だと思われるかもしれない、という懸念があると、笑わせることを断念する。このように、遍在する笑えなさのなかで行き着くのが、そうしたユーモアを一切回避する「離脱」の笑いであった。これは、コミュニケーションを可能にする、いわば「笑わない福島」というひとつの戦略なのである。

他方で、諧謔的なコミュニケーションの可能性も見出すことができた。まず、発災直後の極限状態を生き抜くための、一時的な癒しとしての笑いがある。たとえば、放射能の雨が降るなかで笑いながらバケツリレーをした経験が語られていた。次に、拘束のなかの内輪の笑いがある。親しい間柄では、閉じられたものではあるが、現実のなかに「拘束」された笑いの空間をつくりあげることができる。さらに、壁を取り払う自虐の笑いがある。非当事者が抱える「善意のバリア」と呼べる当事者への過剰な配慮や心配を、当事者の自虐によって取り払うことができる。そして最後に、笑いあう共感の笑いがある。震災を経験していてもいなくても共感し得る「感情」を笑いにすることで、多様な立場にある人々がともに笑いあうことが可能になっていた。もちろんそこにもさまざまな限界はあるが、少なからず自由や解放を感じさせる笑いであると言えるだろう。これらのような諧謔的なコミュニケーションを交わすことができる「笑う福島」という社会があった。

最後に、笑う福島／笑わない福島のコミュニケーションが、震災後の福島が抱えているコミュニケーション分断の問題に対して何ができるかについて考察し、結びとした。

諧謔的なコミュニケーションの不可能性、すなわち笑えなさが辿り着いた先は、笑えないユーモアを用いることを一切回避することによって、笑いを可能にしていくコミュニケーションの戦略であった。このコミュニケーションは、分断や対立のなかでも沈黙に陥ることを回避し、同時に、分断や対立のなかで生きる人々の癒しとなる可能性を持っている。しかし、根本的に分断や対立の問題をいったん棚上げすることによって成立しているため、そのまま温存することになってしまう。震災後の福島を語るうえでのコミュニケーション分断の問題については、そのジレンマからは抜け出せない限界がある。

諧謔的なコミュニケーションの可能性のなかには、当事者 - 非当事者間の壁を取り払う自虐の笑いや、さまざまな立場の人々がともに笑いあう共感の笑いが存在した。それぞれに限界を抱えるものではあったが、立場の差異や分断を越えて、関係を構築する契機となり得るコミュニケーションであろう。この笑いの経験が、いかに分断を変革する新たなコミュニケーションへと繋がっていくかを確かめることまでは至らなかったが、少なくとも共有し得るものを確かめあい、震災後の福島を語りあえる回路を開いていく可能性を持つはずだ。そして、沈黙に陥る受動的なコミュニケーション分断の描かれ方とは異なる、震災後の福島の人々の能動的なコミュニケーション主体としての試行錯誤の姿を描き出すことができたと考えている。

震災後の福島で暮らす人々は、原発事故や放射能汚染といった問題に対する意思表示が困難なものとなるコミュニケーション分断の状況下で、諧謔的なコミュニケーションという、あからさまでない意思表示の技法を用いていた。こうした意思表示の実践は、婉曲的に問題に対する立場や態度を呈示することになり、その積み重ねがコミュニケーション分断という二項対立を内側から問い直す契機を生み出すことにつながるかもしれない。その可能性の行方を見届けることは、今後の研究の課題としたい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ その他

【学位論文要旨】

庄子諒、「笑う福島／笑わない福島——原発事故後のユーモアに関するコミュニケーション社会学的研究」、『立教大学大学院社会学研究科年報』、第24号、2017、103-104。